

資本の諸変態とその循環

中 尾 訓 生

(一)

本稿は『資本論』第二部の第一篇の「資本の諸変態とその循環」を解釈するものである。

解釈はまず、基礎枠組の点検とその精細化という視角からなされている。

基礎枠組とは『資本論』第一部の「商品に表示された労働の二重性」、
「労働過程と価値増殖過程」そして「不変資本と可変資本」へと展開している——すなわちマルクス自身の表現では『資本論』の最良の部分である¹⁾——論理から構築されている。

「一部」の完成された叙述にたいして「二部」は研究ノートであるということ、また「一部」が完成されてから「二部」での課題に着手したのではなく、それは「一部」と併行して進められているということから上述の解釈方法を採用している。

解釈の進展において「一篇」にその論理対象を限定はしているが検討する論述は必要に応じて「二篇」での諸論述にも及ぶことになる。

社会の物的代謝がまず素材の変態としてイメージされることは私達の感覚に適合したものであり、多くの先行者の諸論述のなかでそれを読むことができる²⁾

認識するにあたっての困難は素材の変態が貨幣の増大（価値の増殖）とし

1) マルクスからエンゲルスへの手紙・1867年8月24日・『『資本論』にかんする手紙(上)』159頁 岡崎訳。

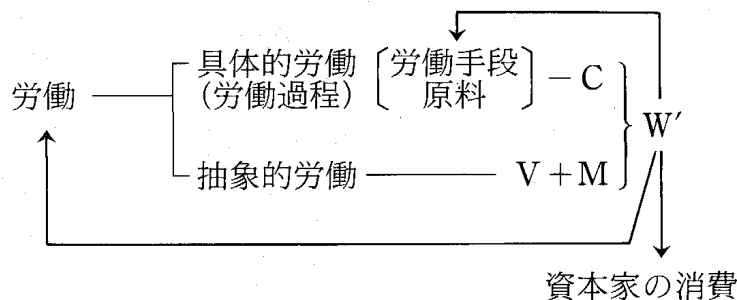
て遂行されているところから生じている。

例えば、A・スミスは素材の変態と価値の循環を混同している。ただ、ケネーとマルクスだけがその困難を克服した。それは彼らが個別的な経験と観察を超えた社会的視角を有していたことによる。

「不変資本と可変資本」の章で私達はマルクスの方法を読み取ることができる。

「具体的有用労働」と「抽象的労働」の作用、すなわちC部分の価値移転と価値(V+M)の創出で労働の对象的諸条件と労働力の再生産が価値の循環として把握された。

図で示されている価値の循環に交換(貨幣の媒介)を付加すると資本の変態・循環図を得ることができる。まずこの点に留意すること。



価値移転と価値の創出が「労働」概念から導出され、それ以前の展開でこの概念に込められていたマルクス体系の独自の意義が物的代謝という画定された対象に焦点を絞って設定されたことにも留意する必要がある³⁾

かくして資本主義社会の本質(Gemeinwesen)が物的代謝と合致したことは、「商品の物神的性格」で先行する共同体との比較で論じられていたが、そ

2) 経済学は、四つの研究課題を包含している。

- 「1. 貨物の生産を規制する法則如何。
- 2. 社会の労働によって生産された貨物が分配される法則如何。
- 3. 貨物が相互に交換される法則如何。
- 4. 消費を規制する法則如何」(ジェームズ・ミル『経済学綱要』渡辺訳)

このように一般化された経済学は、まず物財の変態(生産・分配・交換・消費)を追うかたちで構築されている。

3) 拙稿「不変資本と可変資本」『山口経済学雑誌』24の1・2・3合併号)

の動的メカニズム、社会構成員の関係の再生産と彼らの維持（物的代謝）の解明が「不変資本と可変資本」の章以降の論点である。

「不変資本」「可変資本」は価値増殖過程の立場からの呼称であり「労働手段及び労働」は労働過程からのそれであるという叙述からも推察できるように量的で均一的世界と質的で个性的世界の統合がここで企図されている。

もし「不変資本」「可変資本」概念がブルジョア社会の経済（量）的關係を認識するための要具であるならば、例えばボルトケヴィッチのリカードに依拠したマルクス解釈で知ることができるように、それとリカードの「固定資本」「流動資本」概念との差異は同じ体系内でのものであるだろう。しかしマルクスのブルジョア経済学批判はそれらの諸概念が位置づけられている体系の意味を問うことから始まり、より上位の体系を必要としている。

「不変資本」「可変資本」概念と「固定資本」「流動資本」概念との混同は剰余価値の形成を抹消し、資本主義的搾取の現実の運動を理解するための基礎を埋没させるとマルクスは指摘しているが⁴⁾ 剰余価値の源泉を問う体系と剰余価値の存在を前提として、したがって正の利潤率を所与として展開される体系は連続している同次元のものではない。⁵⁾

両体系の間の認識論上の裂目は——マルクスの体系ではこの裂目は窮極的には労働主体に還元されるということは既に論じてきた⁶⁾——前図のような変態・循環把握が剰余価値の源泉把握に依拠しているところから当然「資本の諸変態とその循環」の展開にも存在している。

したがってまず解釈することは二つの次元（領域）の抽出、そしてそれらが労働主体、すなわち具体的労働と抽象的労働で結合されている点である。

4) K・マルクス『資本論』II 225頁・向坂訳・岩波。

5) (『経済学批判8』・社会評論社・所収)「剰余価値の秘密」 塩沢由典

6) 拙稿・「労働過程と価値増殖過程」『山口経済学雑誌』27の5・6合併号

(二)

先行者の「資本の変態・循環」把握の批判。

「いわゆる重金主義」や「ヨリ発展した重商主義」の説明が依拠した「変態・循環」図は以下のものであるとマルクスは述べている⁷⁾

$$(イ) G-W-G'$$

$$(ロ) G-W---P---W'-G'$$

特徴は、(イ)も(ロ)も出発点と復帰点が貨幣であること、それ故、価値 (=貨幣) の増殖を明白に感得することができるという点である。ただし、(イ)は販売と購売という流通過程だけが表示されているのにたいして、(ロ)は生産過程が表示されている。

ここではまず、(ロ)は次のように変更することがマルクスの意図を解釈するために必要である。

$$(ハ) G-W---P---W-G'$$

すなわち、生産過程に剰余価値の源泉が存するというを彼らの〔変態・循環〕図を描くときは明示すべきではない。

彼らにはその認識は存在していない。

したがって〔生産資本の変態・循環〕図——(二)——も彼らのそれを示すときは同様に(ハ)として表示される。

7) 「定式 $G-W---P---W'-G'$ は、 $G'=G+g$ なる結果をもって、その形態のうちの一の欺瞞を含み、一の幻惑的性格を帯びており、この性格は前貸されて増殖された価値がその等価形態なる貨幣として存在するということから生ずる。力点は価値の増殖にあるのではなく、この過程の貨幣形態に、最初に流通に前貸されたよりもヨリ多くの価値が最後に貨幣形態で流通から引出されるということに、したがって資本家に属する金銀量の増加にある。」 $G-W---P---W'-G'$ の幻想的性格とこの形態に対応する幻想的解釈とは、この形態が流動的な絶えず更新されるものとしてではなく、一回限りのものとして固定されるときに、したがって循環の諸形態の一つとしてではなく、その唯一の形態と見なされるときに、現われる。」(『資本論』II・69頁・向坂訳) $G-W---P---W'-G'$ が、彼らにあっては、 $G-W---P---W-G'$ であること、だから「一回限りのものとして固定される」のである。なぜなら、彼らにあっては、貨殖の源泉は、貨幣を出発点とするこの形態と切離できないから。

$$(ニ) P \cdots W' - G' \cdot G - W \left\langle \begin{matrix} P^m \\ A \end{matrix} \right\rangle \cdots P(P')$$

$$(ホ) P \cdots W - G - W \left\langle \begin{matrix} P^m \\ A \end{matrix} \right\rangle \cdots P(P')$$

そもそも彼らの〔変態・循環〕図を(ロ)や(ニ)としたのでは、それにたいするマルクスの批判は論理的でなくなる。

さて、(ニ)は古典派経済学が依拠した形態であるとマルクスは述べているが⁸⁾ 古典派経済学の完成者であるとされたD.リカードには「資本の変態」という視角は消失している、という点に前もって注意を促しておきたい。

(イ)、(ハ)そして(ホ)は、彼らが経済的諸現象を解釈する場合の基本構図である。

彼らの互いに対立する解釈上の差異⁹⁾はこの構図の差異に帰着する。

(イ)、(ハ)と(ホ)はそれぞれ全体の一側面にすぎないことを明示して彼らの解釈が主観的差異にすぎないことをマルクスは暴露した¹⁰⁾

全体とはいってもなくマルクスの「変態・循環」によって把握された社会である。

彼らの把握した構図がマルクスの構図——基礎枠組——の一側面にすぎないことを彼らの、及びマルクスの構図の形成からみることにしよう。

それを結果において考察するならばすなわち、マルクスの構図を所与とす

8) 『資本論』II・98頁・向坂訳。

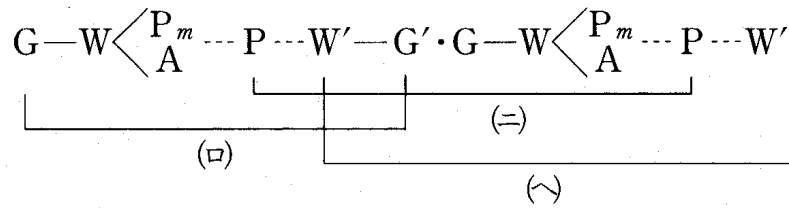
9) (イ)、(ハ)に立脚すると、「個々の資本家はただ労働者としてのみ消費すべく、また資本主義国民は、その商品の消費及び一般に消費過程を他の愚かな国民に一任し、これに対して生産的消費をその終生の任務となすべきである」という説教が展開される。(『資本論』II・66頁)

これに対して、(ホ)に立脚すると、「生産そのものを過程の目的として説明する、すなわち、一部は生産の更新(G-W)のために一部は消費(g-w)のために能う限り多量且つ安価に生産され、生産物が能う限り多種の他の生産物と交換されるべきことを過程の目的として説明することを、ますます容易にする。実際この場合には、G及びgはただ一時的な流通手段としてのみ現われるので、貨幣の特性も貨幣資本の特性も看過され得る」(『資本論』II・107頁)

10) (ロ)、(ニ)、(ハ)はマルクスにとって「資本の変態・循環」から抽出されたものであるから「各々の特殊の循環が他のそれを(含蓄的に)前提するのみではなく、また一形態における循環の反復は、他の諸形態における循環の軌道を含むのである。」ということは明瞭であった。だから、彼らの(イ)、(ハ)や(ホ)に立脚した解釈が、「考察者にとってのみ存立する単に主観的な区別」(『資本論』II・117頁)であると批判し得た。

るならば、本来困難な問題はマルクスにだけあって（つまり、構図を把握する困難）、マルクスを解釈する私達にはその構図はあまりにも自明のこととして、したがってマルクスの説明は冗長なものと感じられるだろう¹¹⁾

図に示されているように、(ロ)、(ニ)、(ハ)は全体の一側面にすぎないことは一目瞭然である。

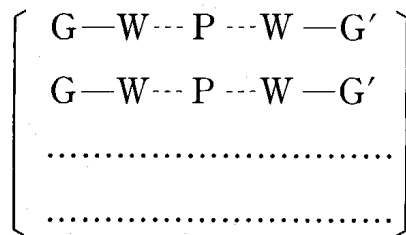


私達にとって問題の要点は基礎枠組を所与とするのではなく、それが形成された論点をこの一篇に導入してみることである。これによって彼らの諸論述がマルクスによって批判される構造を理解することができる。

「G-W---P---W'-G'の幻想的性格とこの形態に対応する幻想的解釈とはこの形態が流動的な絶えず更新されるものとしてではなく、一回限りのものとして固定されるときに、したがって循環の諸形態の一つとしてではなくその唯一の形態と見なされるときに現われる¹²⁾」

G-W---P---W'-G'として把握されたときにはこの形態は一回限りのものとして固定されることもないし、それが唯一の形態とも見なされ得ない。マルクスが続けて述べているように「この形態はそれ自身他の諸形態を指示しているのである。」

彼らの幻想的解釈は、G-W---P---W'-G'に依拠しているのである。G-W---P---W'-G'として把握するとき、それは一回限りのものとして固定される。



11) 日高普『資本の流過程』88頁

12) 『資本論』II・69頁

すなわち、Gから出発して変態を経てGへの復帰ではじめてその増量を確認し得るといふ彼らの日常的経験、具体的実践のそれは表現である。

剰余価値の源泉をマルクスのように生産過程にありと把握しているならば、すなわち $G-W\left\langle\frac{P^m}{A}\dots P\dots W'-G'\right\rangle$ という形態は固定されることはなく、PやW'をも出発点とした形態を予想することができるのである。正しくは、前述したように、この形態は $\dots G-W\left\langle\frac{P^m}{A}\dots P\dots W'-G'\right\rangle\cdot G-W\left\langle\frac{P^m}{A}\dots P\dots W'-G'\right\rangle\cdot G-W\left\langle\frac{P^m}{A}\dots P\dots W'-G'\right\rangle$ という全体の一側面として得られたものである。

これは剰余価値の源泉を把握したことによって自己中心の日常的経験から離脱して素材の変態・循環を抽出することができたということである。

A.スミスは全資財 (stock) を二つに区分し、その一方を資本と規定している。

「かれが自分にこの収入をもたらしてくれるものと期待する部分がかれの資本 (capital) と呼ばれる。」そして彼は続いて資本の変態・循環を次のように述べる。

「資本がその使用者に収入または利潤をもたらすように使用されうるのには、二つの異なった方法がある。第一に、それは財貨を調達し、製造し、または購買し、さらに利潤をえてふたたび売るのに使用されうる。こういうふうに使われる資本は、それがその使用者の所有にとどまるか、または同一の形態にとどまるかのいずれかするあいだは、その使用者になんの収入または利潤ももたらさない。……………かれの資本は、つねにある一つの形態でかれの手をはなれ、もう一つ別の形態でその手に帰って来るのであって、それがかれにある利潤をもたらすことができるのは、このような流動、つまり継続的交換 (変態) のおかげによってだけなのである。……………第二に、それは主人を変えることなしに、つまりもうそれ以上流通することなしに (変態することなしに) 収入または利潤をもたらすような諸物に使用されるのである。」(括弧の語は引用者、A.スミス『諸国民の富』I・449頁・大内訳) A.スミスは第一の部分を流動資本 (circulating capital)、第二の部分を固定資本

(fixed capital) と呼んでいるが、マルクスの指摘しているように前者は流通資本、つまり商品資本や貨幣資本、後者は生産資本の規定と重なる部分のほ
うが大きい、ここで問題とすべきことは、自己中心的な個別的観察に依拠
しそれから未分離なスミスの資本を規定する仕方である。この場合、貨幣を
出発点とするか、生産要素を出発点とするかは、観察者の立場、実践に影響
されているから、(イ)、(ハ)と(ホ)の対立は彼らの立場、実践の対立ということに
なる。

彼らは $W' - G' \left[\begin{array}{l} G - W \left\langle \begin{array}{l} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \dots P \dots W' \\ g - w - g \end{array} \right.$ で表示される〔(ハ)商品資本の変

態・循環〕を認識することは、できなかった。

これを認識するためには自己中心的な個別的観察を超えた抽象力を要する
からである。

商品を出発点、復帰点とする変態・循環をイメージするとすれば $W - G - W'$
 W' となるが、これは交換による使用価値の相互実現という $W_a - G - W_b$
(a 商品と b 商品の交換) で表示されている日常的経験によって否定される¹³⁾

商品資本の変態・循環形態と他の二つの形態との認識論上の差異について
マルクスは以下のように説明している。

「 $G \dots G'$ 、及び $P \dots P$ では終結極なる G' 及び P は流通過程の直接の結果
である。

したがって、ここではただ終局においてのみ一方では G' が他方では P が
他人の手にあるものとして前提されている。循環が両局のあいだで行われる
限り、一方の場合の G も他方の場合の P も——他人の貨幣としての G の存在

13) 「 $W' \dots W'$ はケネーの経済表の基礎をなすもので、彼が $G \dots G'$ に対してこの形態を選
び、 $P \dots P$ を選ばなかったということは、偉大で正確な手腕を示すものである。」(『資本
論』II・115頁)

$G \dots G'$ や $P \dots P$ にたいして $W' \dots W'$ の把握が可能であるためには剰余価値の源泉を
把握することが不可欠である。ケネーは、「農業が人間労働の唯一の剰余価値生産的投下
部面である」としていた。しかし、経済表の完成には、すなわち無数の個別的流通行為
から機能的に規定された大きな経済的諸社会階級間の流通を抽出するには、個別的視角
を超えた階級的視角を必要とする。(『人間の科学と哲学』L・ゴールドマン 137頁 清水・
川俣訳)

も他人の生産過程としてのPの存在も——これらの循環の前提としては現われない。これに反してW'-----W'は他人の手にある他人の諸商品としてのW (= A + Pm) を前提し、これらの商品が発端の流通過程によって循環に引入られて生産資本に転化され、この生産資本の機能の結果として、今やW' が再び循環の終局形態となるのである¹⁴⁾」

G-----G' 及び P-----P と W'-----W' の認識論上の差異からマルクスはW'-----W' はG-----G' 及び P-----P とは相違して本来的に「諸個別資本の総計、すなわち資本家階級の総資本の運動形態として各個別産業資本が他の部分運動と絡み合い且つそれらによって制約される一つの部分運動として現われるに過ぎないところの一運動として考察することを要求するのである¹⁵⁾」と説明している。

$$(a) \quad G-W \left\langle \begin{array}{l} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \dots P \dots W' - G'$$

$$(b) \quad P \dots W' \left[\begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right] - \left[\begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right] - W \left\langle \begin{array}{l} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \dots P$$

$$(c) \quad W' \left[\begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right] - G' \left[\begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right] - W \left\langle \begin{array}{l} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \dots P \dots W'$$

素材の変態を追う視線の軌跡は自己と同一の立場への到達でもって終点となるが、それは、(a)、(b)——正しくは、(c)、(d)であるが、マルクスの叙述に従って表示している。——として与えられる。(a)の場合は貨幣を前貸して利潤を得ようとする人の、(b)の場合は、生産要素を前貸して利潤を得ようとする人の視線の軌跡である。(c)、W'-----W'はその内部にW (= Pm + A) を前提としている、つまりW'-----W'の軌跡を描く視線と同一の視線をその内部に有っている。(a)、(b)、と同様にしてWを出発点とした視線の軌跡を追うと、それはW—G—Wである。

14) 『資本論』II・111頁

15) 『資本論』II・112頁

換言すると、 $W' \cdots W'$ はもともと(ロ)(ニ)の場合と異なって複数の資本の絡み合いとして、すなわち、かかる意味での社会的資本を表示できるものとして設定されている。

W ではなくて W' を前貸しするということは個別的視角からは決して生じないのである。

(ロ)を直接に個別資本≡全体の資本という意味での社会的資本の変態・循環を表示するものとして利用するとその欠陥は、(ニ)の立場から提示されるし、逆の場合は逆であるだろう。これは(ロ)が考察されるときは(ロ)以外の循環形態は考慮されないし、(ニ)が考察されるときは(ニ)以外の循環形態は考察の対象として入り得ないということを示している。例えば(ロ)、(ニ)を比較してみると貨幣資本の役割は異なった様相をみせることが理解できる。¹⁶⁾

さて(ハ)と(ロ)、(ニ)——正しくは、(イ)、(ホ)であるが——の順序関係であるが、前述したように(ハ)が把握されてから(ロ)、(ニ)が導出される関係にある。この順序関係を踏まえてマルクスが(ハ)、 $W' \cdots W'$ の特徴を「生産的及び個人的消費を包括している」点に求めて、そこから(ハ)、が「単なる一個別資本の個別的循環としてのそれ自体を越えて、それ以上のものを指示している。」としていることを理解すべきである。

(ニ)でも(ハ)と同様に生産的消費と個人的消費の表示をみることができるのであるが、(ニ)はあくまでも認識論上は(ハ)からの導出である。¹⁷⁾「一篇」は、「一章、

16) 「生産資本の循環」における「二節」「三節」「四節」で説明されている潜在的貨幣資本を参照。

17) 「貨幣資本の循環においても、その内部に $W'-G'$ が含まれており、また生産的資本の循環においても $W'-G'-W$ が含まれていたのであるから、前2形態においてはたして個人的消費が排除されていたのであろうか、という疑問がまず生ずる。それでは、なぜマルクスはここで総体としての消費が入る、と断言できたのであろうか。この問題は、当然のことであるが、当該循環が個別資本にそくした循環として考察されているのか、また総資本の循環として考察されているのか、それとも個別資本のからみあいを含んだ総和の資本として考察されているのか、という論点と表裏の関係において検討されねばならないであろう。」(侘美光彦「資本循環論」45頁『経済学論集』37巻3号所収)

侘美氏のこの疑問にたいする解答は、次のようになされている。

① $W' \cdots W'$ は、個別資本のからみあいをも表示し得る。

②ただし想定される個別資本は $W' \cdots W'$ であること。個別資本相互の関連は W' をとおす関連としてのみあらわれる。

貨幣資本の循環」「二章、生産資本の循環」「三章、商品資本の循環」「四章、循環過程の三つの形」の構成となっており、それは(ロ)、(ニ)、(ハ)が結合されて「資本の連続性 (Kontinuitat)」「並行性 (Nebeneinander)」が導出されたかのようであるが、既に論じてきたように私の解釈は逆である。

「一章」, 「二章」, 「三章」は各循環形態、(ロ)、(ニ)、(ハ)が機械的に比較対照されているだけの印象を強くあたえるが、マルクスが批判の対象としている彼らの「変態・循環」把握をそれに対置させると「資本の諸変態とその循環」がブルジョア経済学批判の論理、つまり彼らのイデオロギーの維持、再生の論理を示していることが理解できる。

(三)

「貨幣資本の理解においては、通常二つの誤謬が並行または錯綜している。第一(I)には、資本価値が貨幣資本として行うところの、そして資本価値が貨幣形態にあるがゆえにこそ行い得るところの諸条件が誤って資本価値の資本性格から引出されるのであるが、それらの機能はただ資本価値の貨幣状態にのみ、その貨幣として現象形態にのみ負うものなのである。そして第二には

③だから「すべての産業資本がまずW'を出発点として考察されるとき、そこでは必然的に生産手段と生活資料の総体が含まれることになり、またすべての産業資本が終極点をW'として考察されるとき、その生産手段と生活資料の総体の補填が必然的にとりあげられることになり、しかも個別資本のこの補填が、他の個別資本のW'をとおしておこなわれるのであるから、総体としての消費がこの循環から脱落しないで資本循環の中でのみおこなわれると考えられる以外にない。」(「資本循環論(2)」『経済論集』37巻4号86頁・佐美光彦)

この解答は①が重要であるが、氏はマルクスがいかに①の根拠をあたえたかを示していない。だから、「G…G'やP…Pにおいては、それがGやPをもってする個別資本のからみあい論じられない」(同上、86頁)といわれても、何故そうなのか理解できない。

氏も指摘されているようにP…PもW'…W'もともに、 $W' \begin{bmatrix} W \\ + \\ w \end{bmatrix} \begin{bmatrix} G \\ - \\ g \end{bmatrix} \begin{matrix} -W \\ -w \end{matrix} \begin{matrix} P_m \\ A \end{matrix}$ を含ん

でいるのであるから③よりも①と②が疑問に答えるには決定的に重要である。

この点について氏は、W'とW'のあいだに他のWが前提されていることについてのマルクスの叙述の引用以上のことはしていない。

(II), これとは逆に貨幣機能を同時に一つの資本機能ともなすところの貨幣機能の特殊の内容が貨幣の本性から引出されるのであるが、この資本機能は、ここではG-Aの実現において見られるように、単なる商品流通及びそれに対応する貨幣流通にあっては決して与えられていない社会的諸条件を前提とするのである¹⁸⁾」

「産業資本がその循環過程の種々の段階で遂行せねばならない機能形態としての、それらの関連によってのみ、ここでは貨幣機能と商品機能とが同時に貨幣資本と商品資本との機能なのである。それゆえ(A), 貨幣を貨幣として特徴づけ商品を商品として特徴づける特殊の諸属性及び諸機能をそれらの資本性格から導き出そうとするのは背理であり、また逆に(B)生産資本の諸属性を生産手段としてのその存在様式から引出すのも、同様に背理である¹⁹⁾」(括弧 I, II : A, B. は引用者)

ここに引用した二つの叙述は基本的に同じものである。どちらの叙述も「資本」(=社会関係)を把握することがいかに困難であるか、ということすなわち、彼らの認識方法がマルクスの〔資本の変態・循環〕のもとに位置づけられて二様であることが解釈されている。

それは、「商品」の章で貨幣概念を設定して彼らの歴史規定の欠落を批判した構造と同じである。

(I)ではG-P_m, G-A, 生産手段の購入と労働力の購入をそれ自体として考察するならば, W_{p_m}-G-W_{p_m}, A-G-W (=生活手段)であるが、これを人は資本性格と見誤るというのである。(ここで、G-Aは「剰余価値生産の根本条件である剰余労働の提供が約定される買入契約である……のではなく……労働賃銀の形態において貨幣で労働が買われる」ということだけを示している。)

(II)はA (=「労働力商品」)の出現とその再生が単純にG (=「貨幣」)の機能として把握されているということを述べている。

18) 『資本論』II・38頁

19) 『資本論』II・93頁

(A)では、「貨幣」それ自体の諸機能、つまり「循環・変態」過程の一要素を「資本」(=関係)と見誤るというのであり、(B)はその逆である。

(I)と(A)は要素を関係としているという点では同じであり、(II)と(B)は関係を要素としている点で同じである。

そしてI, AとII, Bどちらも、結果的には要素=関係ということになる。換言すると要素と関係の未分離ということであるが、差異は主語としてどちらを選択しているか、というかたちで現われる。

「資本」(=関係)の理解においては、このような通常二つの誤謬が並行または錯綜している。

例えば、A.スミスの場合が典型的にそうである。マルクスは次のように述べている。

「スミスは経済的諸範疇の内的関連を、すなわちブルジョア的経済体制の隠された構造を追求する。他面では、彼はこれとならんで競争の諸現象のうちには外観上与えられているとおりの関連を、したがってまた実際にブルジョア的生産の過程のうちにとらわれてそれに利害関係をもつ人とまったく同様の非科学的な観察者に対して現われるとおりの関連を、併置している。この二つの把握方法、そのうちの一方はブルジョア的体制の内的関連のうちにいえばその生理学のうちに入入するものであり、他方はただ、生活過程のうちには外面的に現われるものを、それが現われ現象するとおりに記述し、分類し、物語り、そして図式的な概念規定を与えるにすぎないものである²⁰⁾」

スミスのこの二つの把握方法を彼の「生産的労働」に関する規定と「価値論」にたいして与えたマルクスの評注のなかにみることにする。生産的労働とは、それが加えられる対象の価値を増加させる。そしてその労働は、「ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりするのであって、こういう商品はこの労働がすんでしまったあとでも、すくなくともしばらくのあいだ存続するものなのである²¹⁾」

20) 『剰余価値学説史』II・210頁・マル・エン全集26のII

21) A.スミス『諸国民の富』I・522頁・大内訳

マルクスに依ると前者の規定は「労働が実現される一定の社会形態、社会的生産諸関係」から導出されるのにたいして、後者は素材的规定である。それは「人間にたいし素材的に相対し、人間にとっての特定の有用性を持ち、一定量の労働がそれに固定され物質化されている物²²⁾」から導出される²³⁾

マルクスがここで取組んでいる問題は、対象と主体の関係であるということが出来る。

前者の規定を基礎にした展開は当の社会の——マルクスの表現では——生理学に突入し、主体(=「生産的労働」)は当の社会に規制されているが、後者の規定では主体はその社会の規制をうけている以上にその社会を操作し得るものとして設定されることになる。

研究者は通常、所与とされている経済的言語(概念)を經由して現象(対象)に接近し、それを解明するが、彼はその言語(概念)の発生には全く無関心である。このことは研究者と主体が言語を媒介に結びついているという

22) 『剰余価値学説史』I・176頁(同上26のI)

23) スミスの体系に並行、錯綜している二つの把握方法の一方の面を徹底的に純化したのがD.リカードである。彼はこのことによってマルクスから古典派経済学の完成者としての地位を与えられた。

「ブルジョア体制の生理学の——その内的・有機的な関連および生活過程を把握するところの——基礎・出発点は労働時間による価値の規定である。」リカードはここから出発してこの科学が展開したその他の経済的諸範疇とその出発点がどこまで適合するか、矛盾しているかを提示することになった。(『剰余価値学説史』II・211頁(同上))

スミスにあっては、マルクスに依ると価値論は投下労働量による価値の規定——リカードが受継いだ規定——と逆に構成価値の規定——賃金と利潤と地代は交換価値の三つの源泉であるとする規定——が混在している。

リカードの基礎・出発点はまたいかなる種類の労働が「生産的労働」であるかという認識問題を消失させているところから始まっている。

すなわちそれは「資本と交換される労働」(=生産的労働の第一の規定)が彼のあつかう労働であるということを示している。しかし、ここで注意しておかねばならないことは、スミスの二つの把握方法の一方は否定されるべきで、他方が科学的に正しく継承されるべきであるという結論にマルクスは至っているのであろうか、という点である。

マルクスはこの二つの把握方法が存在しているという事実にもまず留意し、その二つの把握方法の存立根拠を解明し、両者はあいまって一つの認識方法であることを明確にした。

「生産的、不生産的労働」についての諸論述の批判を通してマルクスが獲得したものは『資本論』の「一部」の「五章、労働過程と価値増殖過程」として結実している。

点の認識がないということである。

前節での(イ)、(ii)、(iii)の立場が示していることは、彼らの実践と諸要素（＝素材）の変態との不可分性である。諸要素を変態させる動因は、彼らの実践に求められる。

要素それ自体（貨幣、商品、生産手段、原材料、労働等々）を観察し、その機能を列挙することには困難は生じないが、資本（＝関係）を把握するためには動因を対象化することが必要である。つまり、彼らが無意識的に採用している主語を対象化する必要がある。それは彼らの実践を対象化することでもある²⁴⁾

マルクスの「ブルジョア経済学批判」の基礎命題が、かくして想起される。

「商品形態は人間に対して彼ら自身の労働の社会的性格を労働生産物自身の对象的性格として、これらの物の社会的自然属性として反映するというこ

24) 実践すること、批判すること、認識することの三位一体が——厳密にはそれぞれの対象を画定していないが——マルクスの展開の基本である。そしてこれら三つの領域に架橋しているのが「労働」概念である。換言すると「労働」のうちに三様の意味をマルクスは込めている。

労働とは外的自然の領有であり、それが本質的実在様式となったのは資本主義（産業）社会においてである。それは社会が労働によって一元化されたことを意味している。

「資本主義社会以前の社会のなかに存続することのできたすべての自然なものの消滅」（『マルクス主義と構造主義』リシュアン・セバーク、田村訳 66 頁）である。他方では社会の全てが人間の領域であること（内的自然の発展）が感知されるようになり、過去の社会との比較対照が可能となった。

「マルクスが使用価値と交換価値を、具体的労働と抽象的労働を、古代ギリシャ・ローマ人のその財産にたいする関係を近代における財産の概念を、それぞれ対立させるとき、彼は二つの型の社会を規定しているのである。

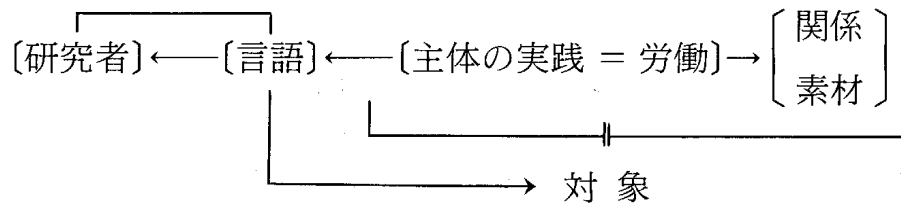
一方の社会では人間の活動およびその相関項——生産される客体——はそれらの個別性が表面に現われるような様式によって示される。人間は武器や道具といっしょに埋葬され、彼の財産は彼が死ぬとき破壊されるのである。他方の社会ではどんな活動であれ、どんな仕事であれ、それらの均等性がたえず指定され、こうした均等性の量化を可能にする道具がつくりだされている。」（同上、68 頁）

具体的労働と抽象的労働という労働の二重性はこの社会の領有様式のうちに読み取ることができるし、また領有の様式はこの労働の二重性で認識することができる。この読み取りと認識は不可分であり、メタルの表と裏の関係にも比することができる。

外的対象の把握にマルクスと彼らの間に相違が存在するのではなく、彼らに欠落しているのは彼らの使用する経済的言語が労働の反映であるという点の認識である。

と、したがってまた総労働に対する生産者の社会的関係をも彼らのほかに存する対象の社会的関係として反映する²⁵⁾」

彼らの諸論述に欠けているのはこの点についての認識であり、マルクスの批判は、これを起点としている。



主体の実践は対象を構成し分析的には関係と素材への働きかけに分類できるであろう。実際にはそれらは不可分であるが。そして実践がまた概念 (= 言語) を生み出し、対象を解明せんとする研究者はその概念を使用する。そして主体の実践 = 労働の中味をマルクスは「具体的有用労働」と「抽象的労働」とで説明したのである²⁶⁾ この二つの概念が、対象を解明するための要具でも

25) 『資本論』 I・95 頁

26) 「商品を二重の形態の労働に分析すること、すなわちその使用価値を現実的労働、または合目的な生産活動に、交換価値を労働時間または平等な社会的な労働に、分析することは、古典派経済学——イギリスでは、ウィリアム・ペティに、フランスではボアギュベールにはじまり、イギリスではリカードに、フランスではシスモンディにおわった古典派経済学——の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な終局的結果である。」(『経済学批判』マルクス・宮川訳・青木文庫・63 頁) というマルクスの学説史批判を「経済学批判」の基礎命題と重ね合わせて読むと、「商品に表示された労働の二重性」という表現に込められた深い意味を理解することができる。

それは、社会は二重の性格を有った労働によって構築され、また経済的諸概念はこの労働の反映であるということ。

マルクスはイギリスの経済学のなかに抽象的労働を、フランスの経済学のなかに具体的労働を読みとり、それを国民的対照としている。そしてリカードとシスモンディとの対比で、あるいはリカードとブルードンとの対比でそれについて論じている。

両者の差異は、抽象的労働で表示された実践と具体的労働で表示された実践との差異であるから危機 (矛盾) への対応にその性格はよく現われる。

マルクスに依ると「リカードは、ブルジョア的生産を……生産の絶対的な形態として把握している。したがって、その生産関係の一定の形態が、生産そのものの目的——豊富——と矛盾したり、それを拘束したりすることはけっしてありえない。」(『剰余価値学説史』62 頁 マル・エン全集 26 の III)

あり、彼らの諸論述を批判する要具でもある。

「批判をする」ということは、通常マルクス体系では対象（＝ブルジョア社会の運動法則）を解明するための傍証としてうけとられがちであるが、決してそうではない。既に述べたように批判をすることで暴露されるのは、彼らがとり結んでいる関係である。この関係は、社会を支えている重要な要因である。社会の再生産は、関係の再生産と物的代謝によって明らかにされる。

次節では、この批判の論理が資本家の実践領域で問題となる価格論や回転論のなかにいかに貫徹しているかをみることにする。²⁷⁾

(四)

いわゆる、スミスの「V+M」のドグマの批判は「三篇、社会的総資本の再生産と流通」の「十九章」で展開されているが、本稿との関わりにおいて、スミス批判の仕方をみることにする。

リカードの体系では「恐慌となって爆発するブルジョア的生産の諸矛盾」は存在しない。

それは、「生産者を顧慮することなく、富そのもの——使用価値の量——をそれ自体究極の目標だとすることによって、矛盾そのものを他の形態で言い表わすのである。」（同上 63 頁）から。

マルクスに依るリカード体系の解釈は、次のことを念頭に置かねばならない。

それは「矛盾」を把握するのは、「矛盾」を矛盾として感ずるのは誰か、という点である。

マルクスが、リカードを高く評価したのは、リカードにあっては、時間が全てであり、人はせいぜい時間（＝抽象的労働）の骨組とされている点であった。労働の二重性を具有している主体は、リカードにあっては抽象的労働に徹底的に一面化されている。

だから、抽象的労働が、ブルジョア的生産関係を支える労働であるということを想起すれば、リカードの理論には、マルクスがいうところの「矛盾」が存在しないのは、当然であるということになる。

これに対して「シスモンディには、資本主義的生産に矛盾があるという根深い予感がある。」「恐慌は、リカードの場合のように偶然ではなく、大規模に一定の時期に起こる内在的諸矛盾の本質的な爆発なのである。」（同上、63 頁）

シスモンディは、マルクスに依ると「矛盾」を回避するために「国家の力」に頼るか、あるいは過去に逃避しようとする。すなわち、「シスモンディの如く社会の現在の基礎を全くそのままにして置きながら、生産の正しい均衡に立戻ろうと欲する人々は、反動家

「すべての商品の価格は、労働賃銀プラス利潤プラス地代に分解されるといふ説はスミスの著書自体に断続して貫いている内奥的部分においては、各商品の価値は、したがって社会の年々の商品生産物の価値も、 $V+M$ に等しい、すなわち、労働力に投ぜられて労働者によって絶えず再生産される資本価値と、労働者によってその労働をもって附加される剰余価値との和に等しい、という形をとっている²⁸⁾」

マルクスにとって商品価値は、 $C+V+M$ であるから何故、スミスはC部分を消失させたかを問題にする。それが、社会全体からみての再生産に関連づけられている。

スミスが問題にしたのは価格の決定条件であり、そのための価格のいわゆる $V+M$ への分解である。

生産物の価格が以下のように分解されることは日常的経験から自明のことであってスミスがこれを否定しているのではない。

である。何故なら、論理を一貫せんがためには、彼等は過去の産業のあらゆる他の条件の再生をもまた欲しなければならないから。」(『哲学の貧困』マルクス・62頁・岩波文庫、山村訳)

留意すべきことは、シスモンディが矛盾(=危機)を感じ、それを把握したこと、そして危機への対処への仕方である。危機への対処の仕方の性格は、(その具体的内容は異にしているが)ブルードンの場合と共通していることも付言しておこう。

マルクスがここに読み取ったものは、「具体的有用労働」として後に消化され、展開したものである。

一言にしていうならば、それは、リカードとは対照的に主体の対象への働きかけに力点が置かれ、逆に主体は対象によって制約を受けている点が、稀薄であるということ。だから、社会に矛盾が生じ、人々が豊富のなかにあって苦しんでいるのは、つまり貧豊の拡大は、人々の無知に帰因するか、人々の間の調停がうまく作用していないからであるという結論に達する。あるいはマルクス流に皮肉に表現するならば、神の摂理がまだ人々に開示されていないということであろう。経済学は、シスモンディに依ると「感受性と構想力(l'imagination)」の領域に属するのであり、専ら計算に従属するだけのものではない。〔『政治経済学新原理』(上)35頁、山口・菅間訳〕

マルクスは、リカードへの純化も、シスモンディへの純化もともに斥けた。思考の領域に両者が併存しているという事実を受けとめ、そのことを、労働=実践の反映であると解したのである。

27) 資本の回転は、資本家の唯一の関心事である利潤率に関係している。

価格 = 賃銀(V) + 原料・減価償却費(C) + (利潤 + 地代)(M)。スミスは消費された生産手段・原料の価格も賃銀プラス

$$\frac{C(1+r) + V(1+r)}{C(1+r) + V(1+r)}$$

↑
↑
↑
V

利潤(地代)プラス原料・減価償却費に分解され、窮極的に価格は賃銀プラス利潤(地代)になると説明している。すなわち、rを利潤率とすると、図で示されているような構造を想定したといえる。

スミスを継承したリカードは、スミスが遭遇した困難——価格を決定するためには、利潤率を決定することが必要であり、利潤率を決定するためには価格を決定する必要がある——を克服した。

利潤率を決定する方程式は「生産物A, B, C, ……における支出が還元される生産物、a〔賃銀財〕の生産条件」として与えられる、ということを明らかにした²⁹⁾

だから増殖した価値を出発点とする「W'-----W'は、資本の回転の考察には利用され得ない」ので、回転の考察のためには、G-----G'とP-----P'の形態が取りあげられる。この場合のPは生産過程を表示しているのではなく、生産要素と解すべきであろう。「貨幣、商品(生産要素)なりの形態における資本価値の前貸をもって資本の回転は、始まりまた常に循環する資本価値が前貸されたときの形態で復帰することを必至とするからである。」『資本論』II 179頁

しかし、資本家にとっては資本価値が、前貸されたときの形態で復帰するかどうかは問題とならない。利潤の計算には、それは無関係である。実際には「資本の回転期間は、最初に投下された前貸資本とひとしいだけの価値額が、生産物の売上の中から費用として回収されてくるまでに要する期間」(「前貸資本量と資本の回転・構成」公文俊平『経済評論』1962年8月号)(=価値回転期間)であり、それは、資本の回転数の逆数として得られる。

公文氏は、マルクスの資本の変態・循環から導出した「回転期間」を批判する。

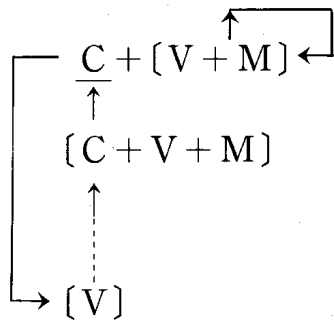
マルクスの規定した「回転期間」は「断続的生産方式」が採用されている場合にのみ、妥当するのであって、「単線的連続生産方式」や「並列的連続生産方式」の場合は、適合しないことを明らかにされている。

マルクスの規定した回転期間は、生産期間と流通期間の和である。「個々の事象としてではなく週期的過程として規定された資本の循環は、資本の回転と呼ばれる。この回転の継続期間は資本の生産期間と流通期間との和によって与えられている。この総期間は資本の回転期間をなす。」(『資本論』II 180頁)

マルクスは、スミスの説明を『剰余価値学説史』（「三章」）で詳細に根気よく検討している。それは、C部分が窮極的に補填されるかどうか、というかたちでつまりC部分と交換される部分が存在するかどうかと再生産の視角から生産部門を幾つかに分割して検討している。

そしてスミスの説明は「次のことが論証された場合にのみ空虚な遁辞でなくなるであろう」と述べている。

「すなわち、その価格が直接にC（消費された生産手段の価格）+V+Mに分解される商品生産物は、結局はかの消費された生産手段をその全範囲にわたって補填し、しかもそれ自体は単なる可変資本投下すなわち労働力に投



ぜられる資本の投下によって生産される商品生産物によって『補填されるということが論証された場合である³⁰⁾」

マルクスの説明を図のように解するならば矢印で表示している投入・産出

このような回転期間（＝現実的回転期間）は実際の利潤計算には適用できない。

素材の変態を下敷にして循環＝回転とする規定が妥当するのは、断続的生産の場合だけである。

それでは、価値回転期間の背後にこのような現実的回転期間を設定する意味は、なんであろうか。（『資本の回転』馬場克三『経営財務論』馬場・片山編）

マルクスは、資本家がいつも誤った表象をもっていることを「現実的回転期間」から指摘している。「資本家の空虚な頭では流通時間の記憶が消えうせている。」「彼らは、生産を中断なく進行させるには常に産業資本の一部分しか事実上生産過程で働かえないという、この主要契機をいつも看のがしている。」（『資本論』II・310頁）

資本家は、資本の効率を高めるためには「並列的連続生産方式」を採用するであろうが、（公文俊平・前掲論文）この場合にこそ最も上述のマルクスの指摘はあてはまる。

資本家の回転数を高める努力、またはそれへの関心は、価値回転期間の背後に存する現実的回転期間からの背離を助長する。つまり、それは社会の物的代謝——現実的回転期間は素材の変態・循環から導出されたものである。——が、増々その姿態を隠し、歪められていくということである。社会の物的代謝にとって基本的なことは、物的構成である。

例えば、生産財と消費財の区分や、さらに生産財内部における第一次の生産要素と第二次の生産要素の区分等は重要であるが、これは資本の効率を高めること、すなわち利潤率を高めることとは直接的に連結しているのではない。資本家はこのようなことには直接的には関心をもたない。

の経路の想定は現実に適合しているかどうかは別にして理論上許容されることであろう。しかし、マルクスはこれを空虚な遁辞として退けることによって、一括してスミスの価格決定の視角、再生産論の方途を否定する。

さて、本稿がここで注目しているのは、否定の論拠である。

「A・スミスの第一の誤謬は、彼が年々の生産物価値を年々の価値生産物と同一視している点にある。……………この混同によって、スミスは年生産物の不変的価値部分を追出す。この混同そのものは、彼の基本的見解における他の一誤謬に基づいている。すなわち、彼は労働そのものの二重的性格を、労働力の支出として価値を作り出す限りでの労働と、具体的有用労働として使用対象（使用価値）を作り出す限りでの労働とのそれを区別していない³¹⁾」

「労働の二重的性格」を把握することができなかったから、スミスの価格論は誤りに陥ったとするマルクスの論断は極めて強引であるように感じられる。

しかし、マルクスはだからこそ価値回転期間を現実的な回転期間から導出しようとしたのである。

山田氏のように「資本回転論とは価値増殖に触発された近代市民的物質代謝過程＝社会的生産力の総体的動態を時間的展開のうちにとらえようとするもの」(資本回転論の視座と課題) (下) 115頁 山田鋭夫、『経済科学』18の2号) と単純にいうことはできない。

山田氏は回転時間の短縮と価値の増殖を直接的に単純に結びつけるが、価値の増殖に直接的に結びつくのは回転数の増大としての回転時間の短縮であって山田氏の解釈した、流通時間(期間)と生産時間(期間)の和としての回転時間(期間)ではない。この回転期間は資本家には認識されないのであって、この回転期間によって資本家の行動形態を論ずることはできないのである。

「回転時間の短縮は、そのものとしての価値増殖の発展をもたらすだけではない。……………このことのなかには、じつは社会的物質代謝過程の巨大な発展が客観的に内包されていることを看過してはならない。」(同上, 110頁 山田) 看過してはならないのは、価値増殖の発展が社会的物的代謝過程を歪めることである。

山田氏の資本回転論解釈の問題は、出発点にある。「回転論を積極的に自然史的な社会的物質代謝総体(生産物形成)の特殊歴史的＝資本制的な存在形態(剰余価値形成)を解明する一理論領域として理解しようとするかぎり、つねにG……G'とP……Pとが資本回転分析の基礎視座となっていなければならない。」(同上, 82頁 山田, 『経済科学』18の1号) 資本の回転を考察するためにマルクスがG……G'とP……Pの形態を取り

マルクスに依ると、年生産物がここに存在しているということは、具体的有用労働の結果であり、この労働によって消費された生産手段の価値(=C)が保存されている。さらに抽象的労働によってV+Mが作り出されたのである。

スミスは有用労働によって生活手段の形態をとった生産物が作り出されることは認めるが、C部分が過去から受継がれて保存されていることを見落しているというのである。

この批判は、極めて認識論的であることに気がつくであろう³²⁾

「労働の二重性」を基軸にしたマルクスの生産価格論が、抱えている問題点は、価値から価格への転化問題として提示されているが、この問題がマルクス体系にとって有意味であり得るためには、未知数を一つへらすか、それとも方程式を一つふやすか、ということではなくて結局「利潤の源泉」つまり「剰余価値の源泉」を問うことの論理的意味に絞られてくる³³⁾

スミスの価格論を完成させたりカードの価格決定論は、利潤の存在を所与

あげるといつているのは、前貸される資本価値が貨幣か、生産要素の形態をとっているがためである。山田氏はそれら両形態が視座として必要であると主張される。

この場合、視座とは、G-----G'については、価値増殖のみ表現している、一面的=狂信的な循環形態であり、そのようなものとして近代市民社会を描きだせる認誕視座である。P-----Pは、自然史な物質代謝過程を観念させるのである。(同上、)

さて、山田氏が解釈している視座を資本回転論にあてはめてみると、新たな視野が開けるのであろうか。私は「資本の諸変態とその循環」でマルクスが展開している以上のものを読み取ることはできない。おそらく山田氏は「資本回転論」の対象が個別資本の領域であることを否定されるために、このような視座なるものを設定されたものと解される。

しかし「資本の回転」は本来的に資本家の実践領域で問題となるのであり、個別的なものである。ただ、マルクスはそれを変態・循環から導出し、それが全体としての物的代謝を背後にしていることを強調しているのである。

山田氏の解釈した視座なるものも資本の変態・循環の一断面であることが認識されているからこそ論理的にそれが全体的視野におさめられているのである。山田氏はマルクスが「資本の諸変態とその循環」をいかにして認識したかをまず解釈すべきであった。

28) 『資本論』II・441頁

29) V. K. Dmitriev 『Economic Essays』 Cambridge Univ. Pr. P.59

利潤率、rが決定される方程式は

$$X_a = aX_a [N_a(1+r)^{ta} + N_1(1+r)^{ta1} + \dots + N_q(1+r)^{taq}]$$

X_a は〔賃銀財〕aの価格

としている。

もちろん、その場合、価格方程式から利潤率が正であるための条件を導出することができる³⁴⁾リカードの体系からは、この条件の意味を問う論点は生じないが、前述したところのスミスを否定する論拠が示しているようにマルクスの価格論は逆にこの条件の意味を問うことから始まっている。

なぜ、実質賃金率は1より小でなければならないのか、ということ我问うことがマルクスの体系では論理のなかに含まれているのである。これは、「搾取」の存在を受けとめている、「搾取」を感じている主体が設定されているということである。

他方では「労働力」の売りと買い $\left[\begin{array}{c} A-G \\ G-A \end{array} \right]$ においては、労働力の所有者と貨幣所有者との関係は、他の商品の場合、 $\left[\begin{array}{c} W-G \\ G-W \end{array} \right]$ と同様に自由な・平等な関係である。この一見、搾取を否定する関係が、労働力の価値規定を（1 - 実質賃金率 > 0）を支えている³⁵⁾

a は単位期間に労働者によって消費された賃銀財の量

この方程式から r は以下の如く決定される。

ここで N, t, a は〔賃銀財〕a の技術的生産条件によって与えられる。

$r = F(N_a, N_1, N_2, \dots, N_q, t_{a1}, t_{a2}, \dots, t_{aq}; a)$ 。

N_a : 〔賃銀財〕a の生産に直接に必要とされた労働量

N_1, N_2, \dots, N_q : 〔賃銀財〕a の生産に必要とされた資本財 K_1, K_2, \dots, K_q に体化されている労働量

$t_a, t_{a1}, t_{a2}, \dots, t_{aq}$: $N_a, N_1, N_2, \dots, N_q$ が投下されてから生産物が販売されるまでの期間。

30) 『資本論』II・444頁

31) 『資本論』II・447頁

32) 『資本論』II・448頁

33) 塩沢由典「剰余価値の秘密」・所収『経済学批判・8』社会評論社

34) V. K. Dmitriev. *ibid.* P. 63

35) 「労働力の価値は、すべての他の商品の価値に等しく、この特殊なる商品の生産、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。……労働力の生産は彼自身の再生産又は維持である。彼の維持のために、生ける個人は一定量の生活手段を必要とする。」(『資本論』・I・221頁)

労働者が得ている生活手段の一定量は、歴史的にある範囲内に与えられている。

マルクスの価格論はこの範囲を定める要因として階級関係を導入している、と解釈するのはドップである。(「スラッファ体系と新古典派分配論批判」『欧米マルクス経済学の新展開』所収・伊藤・櫻井・山口訳)

マルクスの価格論は「搾取」の関係とこれを否定しているような関係を導出する「労働の二重的性格」の概念によって構築されているのにたいして、リカードの価格論は、このような関係への言及は生じない、つまりこのような関係との論理的つながりは存しない。

「搾取」を認識している労働者にとっての、コストと資本家の観念しているコストとは相違している。現実には、後者のスコトが、常識として通用しており、換言するとそれは無意識的に採用されているが、マルクスの「使用価値」(=具体的有労働)は、それを批判するかたちで設定されている。ここで関連づけられている二つの領域は、シュマッハーのいうところの「経済学」と「超経済学」の関連に比せられる。「経済学は私が超経済学と呼ぶものからの指示に従うべき、派生的科学である。この指示が変わるにつれて、経済学の内容も変わるのである³⁶⁾」

ただし、「超経済学」がシュマッハーの「好み」によるものとして、つまり恣意的に設定されていると受けとられかねないのにたいしてマルクスは、二つの領域の関連づけは、人間の行為、労働(=活動)のうちに内在しているものと解している。

したがって、マルクス体系では、シュムペーターのように分析要具だけが、一人歩きして精緻化することはあり得ない³⁷⁾

諸概念は、必ず労働(実践)を背後にしているから対象と密着している。

しかし、対象と密着しているからといって、これら概念が、単に経験的なものであるというのではない。

それらは、ブルジョア社会の特性から規定されている。つまりマルクスの体系においては「具体的なものは、直観や表象の出発点であるにもかかわらず

36) 「経済学は“所与”の環境の内部では正当かつ有効に運用されるが、環境そのものは経済計算のまったく圏外にある。経済学は自分自身の足では立っておらず超経済学という思想から“派生”したものである。……………超経済学とはいったいなにか。経済学が環境の中にある人間を取り扱うときには、超経済学は二つの部分、つまり人間を取り扱う部分と環境を取り扱う部分とから成り立っていることを理解しなければならない。」(『人間復興の経済』E. F. シュマッハー; 斎藤訳 35頁)

37) シュムペーター『経済分析の歴史』① 東畑・訳

ず、思考では総括の過程として、結果として現われ、出発点としては現われないのである。」と認識されており、したがって具体的なものを精神的に獲得すること、すなわち諸概念の構築は、「対象」（ブルジョア社会）と遊離することはない。

例えば、資本の回転期間を「現実的回転期間」から導出する方法は、資本の回転に関する分析要具の種々なる工夫がその対象（＝ブルジョア社会の再生産）と遊離化することを阻止している。

また、都留氏が、ケインズの集計概念とマルクスの集計概念を比較検討され、重要な相違は「抽象が行われる方向のうちにある。」とされているのも上述の意味である。

「マルクスにとって体系の具象化は典型的に漸次接近の過程である。ケインズにとっては、それは投影の角度を変えることである。このようにしてケインズの集計概念が、無関心でいるようにみえる区別は、どんなものであれ、それは実際に集計量のうちに黙示的に含まれているのであり、投影の他の平面では明示的に示されるのである³⁸⁾」

マルクスに比してケインズ概念が、操作的で機能的であり得るのは、投影された現実事象から抜き取ったものであるから、投影された領野では元々、機能的であり得るのは当然のことである。

しかし、投影された領野を集合させて現実の総体が把握できるかということそうではない。それぞれの領野での概念が相互に独立しているからである。

(五)

(二)では、まず彼らの自己中心的——自分の観点を中心化した——社会的解釈が、したがって彼らにあっては、この個別的視角と社会的視角との差異がなく、前者の視角は、後者の視角としても作用していることを、(イ)、(ロ)、(ハ)、

38) 都留重人・「ケインズとマルクス、集計概念の方法論」所収『現代経済学とマルクス』
D. ホロヴィッツ編・名和訳

に立脚したイデオロギーを批判するというかたちで切開されていることを明らかにした³⁹⁾

マルクスのこの説明は、階級的視角すなわち、社会的視角から——これは、利潤の源泉を把握したことによって、だから剰余価値概念が獲得されたことによって確立したのであるが——労働による素材の変態という個別的視角から類推された物的代謝が、同じ視角からの類推である素材の変態・循環による前貸価値の増大——利潤の獲得——とが彼らにあっては、混同していること、しかも、彼らはそれを社会の物的代謝に直接適用していることを、明確にした。

そしてマルクスにあっては個別的視角と社会的視角（＝階級的視角）から社会を把握するという極めて巧妙な展開が、「資本の変態・循環」の基本構図を基礎になされている。

彼らは、決して自己の視角を統一させることはできなかつた。つまり彼らは、社会の各側面を切り取って、そこでの論理整合性は達成することはできたが、社会を総体において把握することはできなかつた。

39) 三循環形態をマルクスは、次のようにも表現している。

I, $G-W-P-W'-G'$ II, $P-C_k-P$ III, $C_k-P(W')$

C_k は、総流通過程を表示している。

「資本の諸変態とその循環」の構造を一度、獲得してしまおうと、それから抽出された三循環形態は、個別的にも、社会(全体)的にも利用することができると考えられるが、しかし、その場合でも三循環の間には差異が存在する。それは、I, II, IIIでよく説明される。Iは、社会全体として貨幣量の増大($G' = G + \Delta G$)を表示しているということは、意味を有さないから、あくまで個別的視角からの表現ということであるが、II, IIIは、個別的にも、社会的にも利用できる。

Pを個別的な生産過程とする場合、まず「前貸し」という点からPは、生産諸要素と生産過程と解すべきであろう、個別的生産——総流通——個別的生産、と表示することで予備金、貨幣退蔵等々の貨幣資本機能を明瞭にすることができる。これは、総生産——総流通——総生産、の視角では明瞭にすることができないであろう。この場合は「資本の流通は普通の商品変態を表示するに過ぎず、商品変態の考察の際に説明された流通貨幣量に関する諸法則が妥当する」のである。

しかしこの場合は、Iや、個別的視角からのII, IIIでは把握できない社会的物的代謝を把握することができる。

いずれにしても、このように視角を操作できるのは、視角が構造化されているからである。換言するとすでに資本の変態・循環の構図を獲得しているからである。

スミスは、神の見えざる手にそれを委ねたが、ある者は切り取った各側面を寄せ集めると社会の総体が得られると解した。

彼らの物的代謝過程における貨幣の説明にそれはよく示されている。すなわち、ある側面からみると貨幣は単なる媒介の手段であるのに、別の側面からみると単なる媒介手段以上の役割が貨幣に課せられている。問題はこれらの側面が統一されていないということである。あるいは、所得流通、 $A-G-W$ 、 $w-g-w$ 、と資本循環との関連の説明にも、それは現われている。

このような彼らの概念の混乱が、起因するところを、(三)で検討した。

『資本論』の冒頭の章で、マルクスは、ブルジョア社会の特性を設定したが、その展開が、ここでより具体的な次元で、彼らの「資本」に関する規定を批判するというかたちで与えられている。

(三)では社会的視角の構造が深められて提示されている。すなわち個別的視角と社会的視角の構造上の差異はどこにあるのか。

換言すると社会認識の方法、社会を総体において把握するということが、どういうことなのか、ということである。

マルクスは、経済的概念 (= 言語) の発生を問うことによって、彼らが無意識的に採用している概念のうちにその母胎を抽出して、彼らの社会解釈の一面性の暴露に至る。

しかし、このことは彼らの社会への帰属感が不安定で、根拠のないものであるというのではない。逆である、マルクスは彼らの社会解釈が、(二)で説明されているように社会そのものに根をもち、繰り返し生じることを明確にした。「資本の変態・循環」の基本構図の概略は、剰余価値の源泉を把握したことによって獲得されたことは、(一)で述べたとおりである。

経済的諸財は、この構図のどこかにその場所を得ている。

$$\text{-----} W \left\langle \begin{array}{c} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \text{---} P \text{---} W' \left[\begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right] \text{---} G' \left[\begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right] \text{---} W \left\langle \begin{array}{c} P^m \\ A \end{array} \right\rangle \text{---} P \text{---} W' \text{-----}$$

そして順次に変態をし、その価値の増殖が達成される。それらは、労働力、

生産手段、商品、貨幣として、さらにまた中間製品、完成品として、あるいは生産財、消費財等々と分類されるが、この構図のどこかに場所を得ているかぎり、(ただし、 $g-w$ は、変態が途絶するので除外されるが、)生産資本、流通資本、あるいは固定資本、流動資本、また商品資本、貨幣資本に分類され、全体的に相互の關係に齟齬を生ずることなく設定される。

資本とは価値の増殖体であり、運動体である、したがって図に示されているように連続性を有する。

彼らはこの構図を獲得できなかつたから、 $G \dots G'$ か $P \dots (P')$ あるいは $W-G-W$ をイメージすることしかできなかつた。だから彼らの資本規定は、(イ) $G \dots G'$ か、(ロ) $P \dots (P')$ を基礎としている。

彼らの規定は、出発点の G 、または P (生産要素)に強く制約されているし、また、(イ)あるいは(ロ)の形態そのものに制約されている。だから、(三)で検討したような資本規定が生じてくる。

形態を構成している要素と(イ)あるいは(ロ)で表示される形態との關係はマルクスの構図で示されているような三循環の統一としての形態と要素との關係とは異なっている。

前者の場合は、ある面では要素の機能が強調され、他面では、(イ)あるいは(ロ)が強調される。彼らにあっては、要素の機能と形態とが未分離である。

(イ)を採用すると G' が、つまり流通過程が注目されるから(それは無意識的に、彼らの実践、立場から採用されている。)形態(=關係)のニュアンスが強くなり、(ロ)の場合は、生産過程が注目されるから要素の機能の面が強くなる。

マルクスの「ブルジョア経済学批判」の基礎命題は、外的対象を把握するさいの概念(言語)が、素材(=要素)か、關係を表示しているということを語っている。

どちらの言語を主語とするかによって、構築された理論の性格が相違してくる。

その相違が顕在化するの、その理論がいかなる実践を要請するかという点においてである。

リカードとシスモンディとの対照でマルクスが語っているのは、このことである。〔注〕26参照〕

その相違をイギリスの経済学とフランスの経済学との国民的対照にまで一般化しているが。

「抽象的労働と具体的労働」という二重の形態の労働で、マルクスがこれら二つの経済学を整理していることは、既にみたところである⁴⁰⁾

マルクスは主体の外側にあると観念されている対象を把握しようとしている彼らの諸論述を、主体（＝労働）に還元し、そこから対象を画定し、それを把握する旅に向ったのである。

だから、主体が理論的に、豊かに具体化されるのは、対象である社会が、具体的に把握されていくということである。

社会はマルクスにとって常に主体との関係において与えられている。

ここにこそ、批判の武器としてのマルクスの理論の強さがあり、認識論としての不完全さがある。

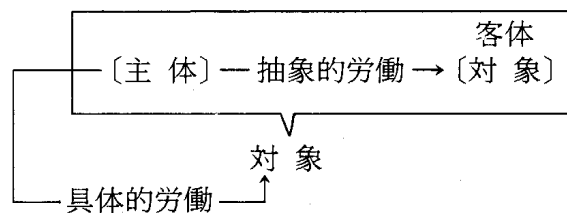
それは、どこまでいっても主体は、決して完結した体系のなかにおさめることはできないからである。「労働過程」で人間（＝主体）は無限の可能性、創造性を秘めているとして、しかし、それ以上には把握されていない。

〔二〕でのマルクスの「資本の変態・循環」の基本構図は、実はこのような主体を基礎にして獲得されている。

だから、全体（階級）的視角とは、このような「労働の二重性」概念による主体の視角である⁴¹⁾

40) 拙稿「商品に表わされた労働の二重性」『山口経済学雑誌』27の1・2合併号

41) 「労働の二重性」概念による主体の視角を図示すれば、以下の如くである。



「主体」は、労働者階級でもあるし、労働者でもあり得る。マルクスは、明示的に区別はしていない。

(四)でみたように、価格論の次元においても、資本の回転という次元においても彼らの諸概念は「労働の二重性」概念によって批判されている。

その批判は、二つの方向においてなされている。一つは、価格がいかんして発生し、当の社会において、いかなる意味を、役割を担っているかということ。

もう一つは、価格がいかなる条件のもとに成立し、いかなる条件のもとに決定されるかということである。

前者は、発生的問題、後者は分析的問題であるといえるかもしれない。

通常、「経済学」が問題とするのは、後者の価格決定論に限定されるのであるが、しかし、未知の惑星から来た人に価格現象を説明しなければならないとすると、この二つを問題としなければならないであろう。

未知の人にとっては、価格はまさにマルクスが名づけたように「社会的象形文字」である。

彼にこの「象形文字」を理解させるためには、マルクスは私達が無意識的にとり結んでいる関係の解明が、まずなされるべきことであるとした。しかる後に、価格決定のメカニズムが問題とされるべきである。

マルクスは、この二つの問題(領域)を、「労働の二重性」概念で結びつけた⁴²⁾

彼らのある者は、「抽象的労働」の立場にあり、他の者は、「具体的労働」の立場にあるという場合、どちらの場合も認識対象(客体)と主体は、分離されている。彼らの展開上の差異は、関係を表示している概念(言語)か、素材(要素)を表示している概念のどちらを主語として採用しているか、という点に生じる。

彼らの諸論述を「抽象的労働」か「具体的労働」の下に整理するのであるが、マルクス以降の諸論述をマルクスの方法で整理できるか、どうかを検討するのは、私達の課題である。例えば、選択理論に基づく価格決定論——いわゆる、俗流経済学の理論と称されている——が、どちらの概念に含まれるのか、ということ、あるいは別様の整理の仕方があるのかということ、これはマルクス理論の解釈にとって重要なことである。

マルクスがいうところの古典派経済学と俗流経済学の分類の鍵は、マルクス体系に存する「労働の二重性」概念を結節点とする二つの領域の関係の仕方にあるように思う。

この点についてとりあえず「価値と価格」(置塩信雄『経済学研究』1954年 年報1)と「ジェヴォンズ革命」(M・ドップ『価値と分配の理論』岸本訳)を参照されたい。

42) この二つの問題を、マルクスの叙述のうちにもみるならば「価値形態論」の次の叙述が、格好である。

「一篇」は、社会の物的代謝そのものが、とり上げられているのではない。それは、「三篇、社会的総資本の再生産と流通」で、とり扱われている。

ブルジョア社会の再生産の分析は、マルクスにあっては(一)で概略したように、現実には商品交換 (W-G-W) の内部に包含されている社会構成員の生存・再生産と彼ら構成員が相互に意識的あるいは無意識的にとり結んでいる関係の再生産とをそれぞれ抽出してなされているのであるが、「一篇」の対象は、後者であるといえることができる。

それは、「剰余価値」の源泉を問う体系の上に構築されている。

これにたいして、前者は「剰余価値」の存在を所与として、つまり「利潤率」は正であることを前提とした体系として与えられる。

(一)、(二)、(三)、(四)において解釈してきたのは、彼らの社会解釈の検討から、彼らの有している社会に対する意識が物的代謝の過程で生じてきているということ、つまり、彼らのとり結んでいる関係の再生産である。

「亜麻布 20 エレ = 上衣 1 着 または = 20 着、または = x 着となるかどうか、すなわち、一定量の亜麻布が多くの上衣に値するか、少ない上衣に値するかどうかということ、いづれにしてもこのようないろいろの割合にあるということは、つねに、亜麻布と上衣とが価値の大いさとしては、同一単位の表現であり、同一性質の物であるということを含んでいる。亜麻布 = 上衣ということが方程式の基礎である。」(『資本論』 I・65 頁)

亜麻布と上衣の交換比率を決定するという問題にとりかかるためには、まず 亜麻布 = 上衣、すなわち、使用価値を異にしているものが、何故等置されるのかということを知明すべきであるとしている。